

日本の七〇年戦争(1)

府川 きよし

連載開始にあたって

平清盛が 平安時代末期 律令政治のトップ
太政大臣に就任 その後一七〇年代以来
続いてきた 武家政権の変形の一つが

「明治政府」と私は思っている

戊辰戦争という 倒幕をめざした内乱の結果
成立したいわば 軍市政権であった

詩人会議五月号 床島まちこ「追体験」に触発され

私も「戦争」の追体験に 挑戦して行きたい

かつて読んだ丸山静雄著「日本の七〇年戦争」を
すぐ思い出し 本棚から取り出した

明治政府の発足から七年目 一八七四年台湾へ
翌七五年朝鮮へ 艦隊を派遣・戦火を交えた
それ以来 一九四五年の大敗北に至るまで

「自由民権運動」を 強権で抑圧した政府は

アジア諸国に攻め入り 足掛け七二年

明治憲法・天皇制のもと 侵略戦争を続けてきた
丸山が記述した「日本の七〇年戦争」を

戦争の始まりから終結まで その実態を追
私の体験 学んできた想いも込め描きたい

コロナ騒動で 外出自粛の好機を逃さず

長期の連載を スタート

「はじめに」で丸山は

わたしは 兵隊・下級将校の幹部候補生出身の
陸軍少尉として 日本軍を内側から垣間みた

次に新聞の従軍記者として 闘いの中に身をおき
加害者として 日本軍が崩壊する姿をみた

戦後 新聞特派員として アジアの戦場を
被害者の視点から 顧みる機会をえた

この三つの体験を振り返るに 日本がアジアで
起こした戦争をふり返り 考えてみたい

アジアに展開した 日本の戦争は

台湾・朝鮮出兵に始まり 完全な敗北に至るまで

七一年間一貫した戦いであった と捉え

呼び易いように 「七〇年戦争」と名付ける

戦いは 大国主義的な対外膨張の欲望から

西欧の植民地支配を壊したが

日本的な秩序 自国本意の自給自足の経済圏を
強制するに留まった という事実を 掴んでほしい

客観的な歴史認識のなかに 救いがある

そういう立場に至るとき 自らが謙虚になり

アジアの人と同じ立場になり 共生も可能だろう
だいじなのは謝罪や補償を貫く 心の戦争認識だ

それにより 加害と罪の意識から開放される

かつて人類は「バラ戦争」三〇年 英国の内乱
英国王と仏国王の「一〇〇年戦争」

「十字軍の戦争」は 二〇〇年つづいた

室町時代 京都を焼き尽くした「応仁の乱」は

一四六七年から七七年の十一一年間の内乱だ

国家の名で 国民を犠牲にして行われた

「日本の七〇年戦争」は 日本帝国が勃興

崩壊に至る 寸劇かもしれない

指導者は脚本を書き 自ら演じ消えていった

日本が 殆どのアジア諸国 世界各国と

間断なく戦った七〇年は 異常であった

ときに闘いに異を唱える者 アジアへの理解を

示す者もあったが その少数者の「善意」は

とうとうたる戦いの大勢に 押し流された

戦争は 愚かな意図から始められる

狂気で戦い 破れた後 七五年が経過したが

今なお 侵略戦争であったことに目をつむり

逆に美化しようとする 動きさえある

そのうえ 辛い教訓から生まれた「平和憲法」を

改悪し 再び戦争ができる国にしよう

画策する愚かな勢力が 台頭している

日本人にとって 侵略戦争だったとするのは

悲しく 決して楽しいことではない

だがそれをしなければ この国は救われない

侵略とは 他国に攻め入り 領土を奪うこと

侵略とは 侵入して財産を掠め取る

侵入とは 彼の領域に不法に入ること

「七〇年戦争」は そうした行為の集積であった

その事実から 目を逸らすことはできない

歴史を認めない者に 平和な明日はない
わたし達も国も 作り上げた「虚構」の中に
安心して 生きることはいできない

アジアの正しい理解のために

戦争体験の風化

アジア太平洋戦争が終わった後
日本は新憲法を定め 不戦と平和を誓いあった
それから 四分の三世紀が経つ
苦渋の戦争体験は いっしょか風化
「いつか来た道」を歩む風潮が生まれている
戦争のハイテク化 ゲーム化は
戦争を幻想へ 麻痺させる恐れがある

日本は戦争の罪を 自ら裁こうとしなかった
戦争指導者は長く戦後政治をリード 国民も
戦争の本質を考える事は 余りなかった
「侵略戦争とは思わない」と暴言する政治家
数えきれないほどの 事実がつづいている

歴史の教訓を学ばず なんと空恐ろしいことか
歴史認識を訴える

戦争はある日 突然降ってくるものではない
長い間の誤解・不信が積み重なり
増幅され 相互の関係を緊張させ
それが暴発・爆発して起こる
戦争への恐れ 警戒心をやわらげ
戦争に馴らされる思想の宣伝 方向づけが
治安警察の強化と 相まって徐々に
戦争の道へ 民衆を駆り立ててゆく
それらを芽のうちに 摘み取る必要がある
第一歩として 戦争に対する歴史認識を訴える
敗北までの七一年間 日本はアジアで
戦争をしてきた事実を 認めることから始まる

かつて日本は 隣国・アジアを先進国として
その文化を熱心に吸収 尊敬・謙虚であったが
秀吉の朝鮮侵略 倭寇の略奪はあったが
大筋で互恵共存の基調は 変わらなかった
明治維新以来 天皇制国家の確立めざし

府川 きよし

富国強兵は 殖産興業と近代的な兵制を整備
明治政府は たびたび外征の軍を起こした
日本人になれ親しんだ童話・桃太郎型戦争で
住民を従えて遠征 宝物・資源を持ち帰る
その出発点が 台湾出兵であった
七一年間 軍事行動がなかった年は殆どない
たまたま戦争が つづいたのではなく
一貫した 植民地獲得の戦争であった
住民の抵抗運動は一族命がけ 正に戦争だ

戦争は問題を なに一つ解決せず
もう一つの戦争を 呼び起こした
幕僚・将軍は 一度も真剣に反省することなく
責任を取る軍人・政治家はいなかった
国内では 自由・人権が抑圧され
犠牲は 国民にしわ寄せされ 被害者であり
アジアの戦場では 兵士は加害者であった

「七〇年戦争」という呼び方

連合国側も そういう視点に立っていた

カイロ宣言 ヤルタ協定 ポツダム宣言などは
日本が戦争により奪い取った地域のすべてを
放棄し 退去することを求めた
日清戦争前の 原状回復までさかのぼった
連合国は 明治政府が起こした「日本の戦争」の
七一年にわたる一貫性・一体性を問題とした
日中戦争は 十五年戦争という呼び方がある
五十年戦争とは 日清戦争から敗戦までだ
その二十一年前から 台湾・朝鮮で清朝と争った
「七〇年戦争」は 丸山がはじめて名付けた
この捉え方は 歴史認識を重視しているからだ
将来この呼称が 使われるようになるだろう

この間 通常戦争から核戦争にいたるあらゆる
形態の戦争が すべて含まれている
国は七〇年かけて戦争をつづけ
戦争で多くの領土 権益を得たが
敗戦によりすべてを失った
最後に 国家の責任を認め
自らの憲法によって 戦争を放棄した
それによって「日本の戦争」は完結した

「つむじ風」のようにアジアを駆け抜けていったそこには「軍国主義の日本」が埋蔵されている抵抗する者もあったが「国益」なるものすべてを押し流され 絶対視されてきたその負の埋蔵文化財を 発掘していききたい

新しい「戦争研究」

明治・大正・昭和の三代は 日本の近代生成期この時代に各制度は形を整え 戦争を推進した「七〇年戦争」研究は 苦渋に満ちた自己解剖だ戦後七五年日本は 直接的な戦争はしなかった苦い戦争の教訓から生まれ 不戦の母体となった新憲法に 基本的に守られたからだ
これからの「戦争研究」は

不戦を前提とした「戦争論」になるべきであろう核戦争論は 被害者意識が先行するさらいがあり日本は 「七〇年戦争」を加害者として戦ったその歴史を 忘れてはならない戦争は悲惨であり 不条理だ戦争という魔性の メカニズムを暴き出し

徹底的に 破壊しなければならぬ
そうした「戦争研究」への挑戦を行っていききたい

「七〇年戦争」の研究を通して
戦争の芽を 摘み取らなければならない
ひとりの人間として アジアの人々と
この世界に正しく生きたいと 願うからだ
わたし達は アジアで戦争ばかりしてきた
無理解 ナシヨナリズムへの無知を告白する
その無知が 戦争を招いた
アジアを離れて 日本の生きる場はない
共生・協力以外に 明るい未来はない
謙虚な反省 正しいアジア観の確立が
あつてはじめて 可能になるだろう

それは アジアの正しい理解から生まれる
その出発点は 正しい歴史認識にある
人々が行き交い 経済が密になっている今
わたし達が 明るい未来を希望するなら
とりわけ真剣に 追求しなければならぬ
かつての大失態を 繰り返さないために

府川 きよし

琉球処分——両属体制

台湾出兵に成功した明治政府は
琉球王国の統合を 完成させようと
一八七五年七月 内務大丞松田道之を派遣
清国との関係を 断絶するよう命じ
一八七九年三月には 警官一六〇余名
軍隊四〇〇余名を増派 軍事的圧力のもと
首里城を接収・占領した
明治政府は これを「琉球処分」といった
「処分」とは 琉球が政府の方針に
執拗に抵抗したため 断固処分する
という意味で使われた 政治的な用語だ
明治政府の役人は 王国の独立性を示した
公文書 清国との特異な関係を記録した
外交文書を没収 国王はじめ役人の地位を剥奪
琉球国を「沖繩県」とし 県庁を那覇に開設
琉球王国は 事実上滅亡した

琉球人は悲憤慷慨し 反日運動を広く展開した

農民は納税を拒否

明治政府の司令に従わないことを「血判誓約」
明治政府の支配を受けることを
いさぎよしとしない者は 新国に亡命
新国政府に 琉球王国の復興援助を求め
アメリカ・オランダ・フランスに実情を訴えた
反日感情は宮古島では 暴動化し新日的人物に
リンチを加え 殺害する事件に発展
政府は厳しく弾圧 命令に従わないものは
斬首する制裁措置を定め 統合を強行した

当時 琉球が一応 薩摩藩の支配下におかれていたことを考えれば
戦争に含めるのは 異論もあろうが
琉球は 清朝政府の影響下におかれ
日本と清国への「両属体制」をとっていた
それを流求人は望み 一方的な処分に強く反発
警察と軍事力による 強行統合は
琉球人にとって まさに戦争であった
当事者の意思に反する一方的な軍事行動であり
「日本の戦争」の一つであった

台湾へ出兵 占領 府川きよし

私と中国・台湾の繋り

私と台湾との関わりは、今までなかったが友人の息子が、昭和電工で台湾勤務になり現地の人と職場結婚、子供も生まれた時々彼が帰省すると、台湾の土産を頂く先日、父親がコロナ渦、散歩がてら台湾産の果物・新鮮なライチを、持って見えたそのくらいの関わりしか、表立って見当たらな中国には八回、友人たちと各地を巡った日中友好を掲げる、友好協会のツアーが多い広い中国を、かつての戦場・歴史や観光地、発展途上の大都市等、数日の日程で回ってきた摘み食いした程度で、台湾には訪れていない台湾、中国に、近く訪ねたいと思っている記録大国・中国の歴史書に、縄文時代の晩期か日中間の交流が、記録されている

侵略戦争の始まり

琉球人殺害事件から 沖縄が日本領土に

この発端は、いまから一四九年前宮古島、八重山島の住民が、三艘の船で年貢を琉球に収め、帰途に台風にあい一八七一年十一月(明治四)台湾東部・牡丹社蕃に、六六人が漂着そのうち五四人が、現地人に斬首など殺害され物資も奪われた「牡丹社事件」が発生した二年後の三月、琉球人が漂着、物資が奪われる明治政府は罪を問い、天皇の権威を大義名分に七四年(明治七)閣議で出兵を決定、五月に西郷隆盛の弟・陸軍中將の西郷従道の率いる台湾征討軍三六〇〇余人を台湾に派遣した最初の対外軍事行動、新聞は「征台の役」と記す

台湾は一六八三年以来、中国(清朝)のゆるい支配下にあったが、古来より高砂族が住み、広く海岸平野に住み、狩猟、漁労で暮らす

約三千年も前から、友好が育まれてきた私達日本人は、アジア大陸から渡って来た中国大陸・アジアは、父祖の地、人・物・文化など、進んだものが日本にやってきた、私はそう思っている、だが、日本は明治以来、七五年前までそのことも忘れ、アジアに戦争を仕掛けた叔父さんたちも、中国・アジアへ出征、帰らぬ人が、親戚には二人もいる、中国に旅行したのも、本場・各地の中華料理を、味わうだけでなく、そういう素地のうえに、現地をこの目で見て来たいという思いが、実現した

今回のシリーズへの挑戦は、どう実を結ぶのか、まだ不確かだが、やって見る価値は、実感している、さあ、みなさん、長い歴史・叙事詩を、台湾問題から、始めます、しばしの間、お付き合いください

その後、本土・福建省から移住者がふえ、段々と生活圏を、奪われつつあった、殺害は、彼等の対外不信・不満から起きたチャンスをと、伺っていた明治政府はこの機会を、見逃さなかった

琉球王国は、薩摩藩の支配を受けていたが、同時に国王は、清朝政府に任命される形で清国に、貢物を届けるしきたりがあった、かつて沖縄は、日本と中国のあいだで微妙な地位にあり、両属体制という琉球王国は、両属体制下の平和を望んでいた、明治維新後の国内統一を急ぐ、政府は琉球が、日本の領土であることを、実証しようと、軍事行動にでた

征討軍は台湾南部に上陸、高砂族の一つ、パイワン族の住む・牡丹社に総攻撃を掛け、十八社を武力で「平定」、日本軍は十二人戦死、マラリアの猖獗をきわめ、五六一人が病死した、主要地の占領を終えるや、英公使の斡旋で

清国政府と 北京で交渉がおこなわれ
両国は 議定書に調印 日本出兵は
琉球人の殺害に対し とつた軍事行動で
自国民保護のための 正当行為と認められた
これは琉球の日本帰属を 認める結果になった
明治政府は目的を果たし 十二月に撤退
懸案の沖縄の帰属問題に 決着を付けた
中国との戦争を意図せず 砲火を交えていない
だが明治政府の 最初の海外派兵であり
武力により パイワン族を「平定」した
当初は 台湾「全島」の占領計画もあった
明治政府は この作戦で自信を強め
朝鮮出兵 台湾への第二次出兵に手をつけ
植民地主義的な アジア進出の道を踏み出した
翌七五年の朝鮮出兵は 次々回で詳しく記す

台湾を 武力で占領

その後 九四年(明治二七) 日清戦争で
勝利した日本は台湾と澎湖島の割譲を受ける
九五年五月 軍令部長・樺山資紀(海軍大将)を

台湾総督・兼軍務司令官に命じ
大連にあった近衛師団を 台湾駐屯軍として
台湾に派遣 六月に台北を占領した(雲次出兵)
島民らは 独立国を樹立しようとする
日本の領有に反対 上陸した日本軍に抵抗
近衛師団はこれを排除 六月に台北を占領
明治政府は 島民の抵抗 列強の干渉を恐れ
さらに援軍を送り 台湾全島の占領を急いだ

増援部隊は 第二師団(乃木希典師団長)を加え
総兵力約五万人 軍夫二万六千人
馬九千四百匹 全陸軍の三分の一を動員
海軍は 連合艦隊の大部分を投入
それに対し 島民の武力抵抗は激しかった
日本軍は 十月ほぼ全島を平定
その後 評判の悪い総督政治を布いた

ムチとニンジンで

台湾で 日本が始めたことは
武力による弾圧 それに温情をからめ
産業を起こす殖産をすすめる 低賃金で搾取

差別と並行して 日本への同化策を併用
巧妙で ずるがしこいやり方
ムチとニンジンの 植民地支配だ
総督は 律令(罰則と法令)を強制
司法官を任免できる 駐屯軍の最高指揮官だ
反抗する反日ゲリラを抑えるため
匪徒刑罰令 連座式の自警団(保甲制度)を制定
今まで台湾にない 新しい住民監視システムだ
警察は 罰金 答刑処分例 浮浪者取締規則など
内地にない過酷な法規をもちい 住民を弾圧
警察が住民に対し 生殺与奪の権限を持つ
憲兵政治(兇暴調査・連行・逮捕・監禁・拷問)を追加

平定後は各種勢力の反乱など 多岐にわたり
それにつづく 反日政治闘争も激しかった
動機は 台湾独立のための愛国的精神
日本人の進出で 生活を奪われることへの反発
軍隊・警察の暴行(虐殺・略奪) 憲兵政治への怒り
など これまた多様である

総督は台湾皇帝と云われ 軍事・警察支配を布き
九七年から四年間に 八〇三〇名を逮捕
殺された者は 三四七三名にもなった
抗日ゲリラを 日本側は「匪徒・土匪」と侮蔑
台湾人は 自分達の味方を「義民」と呼んだ
武力抵抗運動には 初期の上陸・南下時代は
中国・清朝の軍隊が戦い

平定作戦では 移住者・先住民の抗戦であり

台湾人の不満が いかに根強かったか 後の
一九三〇年(昭和五) 十月二十七日末明 台湾中部の
「霧社事件」は 山地民族が一斉蜂起
日本の警官 一般人を襲い 一三四名を殺害した
この事件に 端的に示されている
警察官に肉親を殺され・侮辱されたことに報復
彼等は団結して「日本人を殺せ」と言い
漢族警手 先住民警手には危害を加えていない
総督府側は 徹底的弾圧をした
飛行機 機関銃 毒ガスなどを用いて鎮圧
蜂起側を殆ど殺害するか 自殺に追い込んだ
総督府の武断政治を 象徴する事件である
蜂起側の殺害対象は すべて日本人
まさしく 日本との「戦争」であった

台湾を植民地に その結果

府川 きよし

多くの日本人が知らない事実

七五年前まで 日本がアジアで戦争を
続けてきた事実は 消すことはできない
私たち日本人の 今の暮らしぶりでは
そんなことは 想像もできないが
アジア各国を占領・移住し植民地にした
武力を背景に 強引さを発揮
現地の人々が 長年培ってきた財産
資源を奪い取り わが物にしてきた
反抗する者の 生命と自由を奪い
道理に反すること ばかりをしてきた
人々の間に 深く溜まった怨念もあるだろう
それらの事実を 隠さずこの物語で
私は 書いていかなければならない

台湾の近現代史を 学びながら

台湾の実態 日本が何をしてきたのか
初めて知ることばかり 何と多いことか

朝鮮より先に 日本の植民地になった台湾
そのことも 今回初めて学んだ

アジアの子どもは 学校で日本の侵略をならい
親たちからも 日本の過去の誤ち・事実を聞く
自分たちが 過去に惨めな思いを
させられてきた 歴史を学び・身につける

日本人は この事実を学校で習っていない
親・兄弟からも 教えられていない
義務教育・中学校の社会科や歴史で
近現代史まで進まないうちに みんな
卒業させられる それは普通のこと
日本人は 過去の事実をよく知らない
過去の歴史を 知ろうとせず

自分勝手の自国本位を美化する宣伝・情報が
本屋の店頭にも 山積みとなり売られている
売れるから 売るのだと商売をしている
そんな日本の現実を 放置せず

どうしたら 変えられるのか

自覚した者から 始めなければならない

受験には この問題は絶対出ない

差し迫って 学ぶ必要がないのである

日本の若者 私達老人も 働き盛りも

アジア各国の 人々との交流が

密になっても アジア諸国とのこの違い

この格差は いったい 何だろうか

日本人の永遠の 課題に残してはならない

日本は アジアの人々と心を通わせ

信頼される国 日本人として

日本国憲法を使い 活かして

友好関係を 強めなければならない

④ 東南アジアへの 進出基地となった台湾

武断政治と並行し 殖産振興

各種の内政整備が行われた

農業 工鉱業 商業の大いなる振興

塩 樟脳 アヘン タバコの専売制

（茶葉の搾りかす）

鉄道 港湾 上下水道 通信網の建設

行政 教育 文化 医療・福祉機構の整備

貨幣統一 土地所有制 税制 度量衡制の制定

などが 矢つぎ早に進められ

各種産業がおこり 社会制度の合理化

衛生環境の改善 生活・教育の向上が齎され

台湾の急激な近代化に 果たした役割は大きい

その真の狙いは 勃興する日本資本主義に

台湾経済を組み込み 食料・砂糖の供給基地

工業基地とし 南進のための基盤を強化する

帝国主義的な 領土拡大のためであった

日中戦争が 最も激しくなったころ

盧溝橋事件・三〇年代後半から 台湾の軍事化

植民地・南進基地化が 急ピッチで進められる

三六年 台湾拓殖株式会社を創設 強く推進

総督府 台湾製糖資本 三井 三菱の合同出資で

台湾の開発 融資を通じて軍需産業を育成

華南・南方占領地の復旧・開発事業

融資・経済開発 農業改良 綿花・サトウキビ

ゴマの一種ヒマ・ゴム栽培などにあたり

植民・占領地運営の 先駆的役割を果たした

島民の負担は増大 日本人化が進む

軍需産業は発達したが 民間需要を圧迫
農民の労働者化は 働き手を失った
農村を いっそう貧しくした
投資の資金源は 税金である
相次ぐ 増税で台湾人から搾り取った
インドが英国の植民地で あったところと比べ
その税金の三・五倍の重税を 住民に課した
そのうえ公債を買わされ 貯蓄を奨励
総督府財政は潤ったが 島民の負担は増大
日中戦争の進展に伴い 内地は
生産拡充・物資動員計画が発動され
台湾でも 重要物資の鉄鋼 機械
軽金属の製造・販売の国家統制が行われ
軍需産業の優遇策に 合わせるように
日本人の移民が進み 植民地化は進行する

台湾各地に学校が建ち 教育は普及

だが 大多数の台湾人には
高等教育の機会は 与えられなかった

総督府の 教育政策の目標は
統治の末端を担う 下級官吏の育成であり
同化策は 日本語と日本文化の普及
風俗・習慣の日本人化が 熱心に行われた
初等教育は 天皇への尊敬と
忠君愛国の日本型教育に 重点が置かれた
これは 皇民化運動といわれ
国内各地から 日本人も盛んに移住
台湾人の日本化は 日本人と平等の立場に
台湾人を扱うことを意味しなかった
日本国家のなかに 組み入れる布石で
日本人の移住は それを補完するものだ
総督政治は 台湾人の自由と平等
自主独立の願望・決意を理解しなかった
急いで日本に吸収 統合をめざす
傲慢な 日本人化だ

アジア太平洋戦争で 果たした役割

一九四〇年代に入ると 南洋が

不足資源の供給地 商品の消費地
企業・移民の進出地になり

陸軍は 南方作戦の基地として

台湾を位置づけ アジア太平洋戦争の

「帝国の南方における前進基地」として

重要な役割を 担わされるようになる

戦争で台湾人は 多数が軍夫 通訳

軍需工場の労働者として 徴用され

南方の占領地には 九二、〇四八人が送られ

日本の兵器工場には 約八千人が送られた

勤労奉仕に 二七万人、三〇万人が動員され

志願兵・徴兵で戦地に送られた者も少なくない

徴兵された台湾人は 二万二千人もいた

アジア太平洋戦争の緒戦をなす

フィリッピン全土攻略作戦では

第十四軍は 南部の高雄に司令部をおき

主力部隊は 高雄 基隆 馬公から発進

南方作戦に向かう連合艦隊は 基隆から出港

第五飛行集団も 南部台湾から飛び立った

南方作戦の軍需品を 補給するための

兵站の主な基地は 南部仏印だったが

台湾は 中継補給基地として

重要な役割を 受け持った

台湾の開発・拓殖事業は 戦争の拡大

占領地の拡大とともに 巨大化した

占領地経営は 中国の華南から海南島

インドシナ インドネシアに及んだ

日本軍の南方作戦を 裏から

強く支えていたのが 台湾であった

台湾拓殖企業集団 とも呼ばれる

一大勢力が 融資を通じて肥え太った

植民地・インドで有名な英国の東インド会社

インドネシアの オランダ東インド会社に

似た巨大な 一大経営集団になった

戦前 日本最初の植民地・台湾は

日本の資本主義的 帝国主義発展を支え

第二次植民地の南方・各地占領地の獲得

その後の植民地経営に 駆り立てられた

朝鮮出兵 — 朝鮮の派閥抗争に乗じ

府川きよし

私と朝鮮・韓国との関わり

私と朝鮮との関わりは、五〇代後半に日朝協会に入り、在日の人たちとの関わり、歴史探訪のツアーで、主催団体は違ったが、韓国に二度訪れた。その時の印象は「飛行場に降り立ち、最初にあつた一韓国人男性が「竹島は韓国のものだ、日本領土ではない、あなたは、どう思うか」と声をかけてきたこと。この人は、神奈川県に長く住んでいたという韓国人ガイドの、歴史解説も覚えている。「歴史上、日本は数十回も、我が国を侵略した」大衆食堂で食べた家庭料理が、うまかったこと。各地の「アヒラン」を集めたCDを買ったこと。先輩から聞いた話で、朝鮮では派閥の対立・抗争が歴史上、長く続いていたこと、などを思い出す。

江華島事件

一八七〇年代から一九一〇年代にかけて朝鮮は、激しく揺れた。国内には、大院君一派と、閔氏一派の対立、それを受けて様々な騒乱、外から清国、ロシア、日本の干渉がからみ、国内の権力闘争と、国外の覇権抗争が、相乗し騒然としていた。その父が、李朝第二十六代の高宗、のちの李大王、大院君は政略にたけ、幼い高宗の摂政となり、辣腕をふるった。高宗の妻は、閔氏一族の閔紫英、たぐいまれな才女と云われた。大院君と閔妃は、父と嫁の間柄になるが、ことごとくに意見が分かれ、それぞれの一派は、王宮内で抗争が、絶える時がなかった。大院君一派は、排外主義を守り、閔氏一派は、大体において開化政策をとった。大院君が七三年に隠退、閔妃が実権を握った。対立は、その後も持ち越された。明治政府は、この権力闘争に乗じて出兵。

農民の蜂起、宗団の抗争をみるや、機を失せず、軍隊を派遣し、「居留民保護」の名のもとに、軍事力を背景に、李朝政権の内政に干渉し、一歩一歩立場を、強めていった。その発端が、江華島事件だ。

江華島は、京城沖の小島で、京城の入り口にあたる。古来、京城を海上から攻めようとするものは、まず江華島を占領。一八六六年九月、フランス艦隊一八七二年三月、アメリカ艦隊が来襲の際も、江華島が、最初の戦場となった。島には、砲台が築かれていた。

一八七五年五月（明治八年）、日本の軍艦「雲揚（四五）」春日、第二丁卯の三隻は、釜山沖に現れ、雲揚は釜山湾内に侵入して停泊。九月には、江華島沖に姿を見せた。朝鮮沿岸海域の測量調査のためとされた。雲揚は飲料水補給のため、ボートを下し島に接近。朝鮮側では、領海侵犯として砲撃した。雲揚は、艦砲射撃を行ない反撃。上陸して、一時占領したあと引き上げた。

釜山では、上陸した日本の陸戦隊と朝鮮側の軍民と衝突した。江華島の砲撃戦で、日本側は三名の死傷者。朝鮮側は、三五名の死者を出した。これが「江華島事件」と云われる。

軍艦の釜山沖出現、湾内停泊、江華島沖出現、ボートの江華島接近は、朝鮮側の許可なしに行われた。事件は、朝鮮との修交に乗り出した明治政府が、朝鮮側の態度が、煮え切らないとして、強行した砲艦外交であった。

明治政府が求めたのは、朝鮮の開国。朝鮮進出の足場を、獲得する目的であった。二三年前（一八五三年六月）嘉永六年、徳川幕府は浦賀に軍艦四隻を率いて来航したアメリカ東インド艦隊司令官、ペリ提督から、強引に開国を迫られたが、今度は明治政府が、それを朝鮮政府に強要した。明治政府は、事件の損害賠償を求め、七六年二月、陸軍中将・黒田清隆を、全権大使として、随員八〇〇人（殆どが兵士）を、六隻の軍艦の乗せて

江華府（江華島の中心都市）に派遣した
交渉は直ちに開かれ 日本側の威圧の前に
朝鮮側はやむなく日朝修好条約（江華条約）の
締結に応じた

条約に基づき朝鮮側は 釜山のほか元山
仁川二港の開港 開港における居留地の設定
居留民の治外法権

日本商品に対し関税の撤廃（関税自主権の放棄）
居留地内での 日本通貨の使用を認めた
日本側原案を 有無を言わさずのまされた
朝鮮にとっては 甚だしい不平等条約だ

日本の居留地商人は 軍艦を背景に
無関税貿易に乗じ 世界と朝鮮市場との間の
価格差を利用し 莫大な利益をあげた
これは 略奪貿易と云われている

利益は日本に還流 資本主義的・帝国主義的
発展の基礎となり 脆弱な朝鮮市場を混乱させ
都市の手工業労働者 行商人の職を奪い
米価を高騰させ 農民の生活を脅かした
江華島事件により 明治政府は

朝鮮侵略の足場を固めた

壬午軍乱

朝鮮政府（閔氏政権―閔妃一族による政権）は
八一年五月 軍の近代化に着手

その養成を受ける形で 八二年明治政府は
日本公使付武官・堀本礼造少尉を軍事教官として
派遣し 軍隊の編成・訓練・指導にあたった
改変のため 多数の兵士が職を失い

俸給米の支給が 大幅に遅れることがあり
兵士たちに強い不満を与え 下級兵士たちは
京城郊外の農民層 中間商人と結んで

八二年七月蜂起した（八年は 壬支では壬午
これが壬午軍乱と云われ三大変乱の一つ

（他は 甲申政変 乙未事変…のちに詳述）

反乱グループは 日本を軍事教官を殺害
日本公使館を焼打ち

（花房義實公使は 英国砲艦に助けられ長崎に逃れた

王宮を占拠 閔氏政権を倒した

清国は直ちに大軍を送り 反乱を鎮圧
閔氏政権を 復活させた

明治政府は 国内に高まる「征韓論」を背景に

賠償と将来の補償を求めて 八月 陸軍一個大隊と
軍艦四隻を派遣 その圧力で「済物浦条約」を締結
五十万円という 莫大な賠償金と
日本軍の常時駐兵権を獲得した

（清国は早くから 常時駐兵権を獲得していた）

甲申政変

壬午軍乱では 反乱グループは
大院君一派に組み合っていた

閔氏政権は 清国の大軍に支えられ
復権した関係もあり これ以後

清国の発言が増し 明治政府は危機感を持った
この当時 朝鮮の政界は事大党と独立党の対立期
事大党は清国と組み 独立党は日本の支援に期待
独立党の中心人物は金玉均 清の支配からの離脱
政治の改革を掲げ 清国系要人を排除し
日本人 アメリカ人の支援を求めようとした

八四年十二月 金玉均はクーデターを起こし
事大党の領袖 大臣を殺害 新政権を樹立

これが甲申政変である（八十四年は 壬支では甲信）

事件の直前 朝鮮駐屯の日本軍は
盛んに夜間演習を行った

独立党支援の示威 事大党への警告ともとられた
清朝政府は事態を重大視 大軍で王宮を攻めた

竹添進一郎公使は 国王の依頼を受け
日本軍二〇〇人を率いて王宮に入り

清国兵と戦って王宮を守ろうとしたが
破れて 京城を脱出した

逃げ遅れた日本人は多数捕られ 暴行・虐殺された
金玉均政権は わずか三日で倒れ

完全に失敗 閔氏政権が再登場した

甲午農民戦争

九四年五月 全羅道古阜郡の農民は群守（郡長の
横暴 苛斂誅求に反発し蜂起した

窮乏化しつつあった農民の不満は 農民層に
浸透しつつあった東学教団に 結びつき拡がった

東学とは 東方すなわち朝鮮の学をいい
西学（キリスト教）に対置された

東学教団は六〇年 崔濟愚によつて起こされ

民間信仰を基盤に 儒教・仏教・仙道せんとの教えと
人間平等の近代思想が ミックスした新興宗教
人間平等の思想は 国内では封建支配への反発
対外的には 侵略反対の意識につながり
これが媒体となり 農民蜂起は燃え上がり
そのことが 東学教団を支えた

彼らは農民軍と云われるほどに よく組織され
次々に地方役人を追放し 警察や軍隊を壊滅させ
全羅道内を 開放した

全羅道以外にも 呼応する動きもあつた
農民軍は 中央政府から
派遣された直轄軍をも 破る勢いだった

「東学の乱・古阜民乱・甲午農民戦争」と云われる

閔氏政権は 東学教団を異端の秘密結社と決めつけ
清国に救援を求め 清国は軍隊派遣に着手した

機を伺っていた明治政府（外相・陸奥宗光）は
六月二日 閣議で出兵を決定

閔氏政権から 援軍を求められたわけではなく
清国の出兵を 日本軍派遣の好機と捉えた
名目は公使館 領事館と在留邦人の保護である

圧力で閔氏政権を追ひ 大院君政治を復活させた

この時 ロシアは南下して満州 朝鮮を伺ひ

英国は清国 日本と結んでこれを阻止しようと

フランス ドイツはロシア側に組みした

その間に 清国は朝鮮との歴史的な

宗属関係（宗主権）を護ろうとし

日本は英国の助けを借りて そこに割つて入り

新たな支配権を確立しようとした

朝鮮半島は 内部には 新旧両勢力の葛藤

外には 大国の覇権外交

日清両国の 地域的な覇権主義がからみ

重層的な対立 抗争の場と化しつつあつた

乙未事変うづみ

甲午農民戦争後 権力の座を追われた閔妃と

その一族は やがて復活し 再び権力を掌握した

すでに清国は日本に破れて（後で詳述する日清戦争）

昔日の力はなく 日本は朝鮮への過剰介入

利権の独占によって 国際的な批判を受けていた

その間に ロシアは しきりに閔氏一族に

帰国中であつた大島圭介公使は

陸戦隊と警視庁巡査隊四百数十人を

引き連れ 軍艦で京城に帰任した

六月五日には 大本営が設置され

広島第五師団を中心に 一混成旅団（七、八千人）が

派遣され 同旅団は京城郊外に進駐

他方 清国の第一次派遣隊（約二〇〇人）も

六月八日から上陸 忠清道一帯に進駐した

思わぬ日清両軍の同時介入に驚いた農民軍と

政府軍は 民族的危機として 六月十日手を握り

両軍の撤退を求めるとともに「執綱所」を設置し

農民自らの手による内政改革（貧富汚吏の処罰 住民の

身分平等の確立）をスタートさせた

政府も公認した自治機関で 農民蜂起は収集された

朝鮮政府は 日新両軍の撤兵を要求した

両軍は 進駐の名目を失つたわけだが

ともに要求を無視して居座り

逆に日本軍は 兵力を増強した

大島公使は 歩兵二個大隊を率いて七月

王宮に入つて 清国属邦から離脱を求め

接近し支援を得て 閔妃は親日派を追放し

親日派の支柱の訓練隊を 解散させようとした

追い詰められた親日派と訓練隊は

三浦梧楼公使と謀り 閔氏打倒のクーデターを計画

閔氏一族の親露政策に 憤っていた三浦公使は

公使館付武官 大陸浪人らと画策し

九五年十月 訓練隊二個中隊 日本軍守備隊

二個中隊 公使館員 領事警察 在留日本人らは

大院君を擁して王宮に侵入 閔妃を殺害した

大院君と閔氏一派との陰湿・凄惨な

権力闘争に 終止符が打たれた

これが「乙未事変」である（九五年は 壬支では乙未

日本側の陰謀は たちまち世界に知れわたり

公使の暴挙 守備隊の独断参加は 人々を驚かせた

明治政府は三浦公使を解任 約八〇人の関係者を

広島に召喚 九六年一月 軍法会議にかけたが

いずれも無罪・免訴 誰一人罪を問われなかった

朝鮮では 閔氏一族の悪政を問う前に

「国母が殺された」として

反日感情が いっそう激しく燃え上がった

盧溝橋事件 府川きよし

盧溝橋は北京郊外西南約一〇^キ 永定川にかかる美しく豪華な石橋 「東方見聞録」著したマルコ・ポーロが 西洋に広めたことで有名な橋 一九三七年七月七日 七夕の日に事件は発生 現地には 日本軍の支那駐屯軍が派遣されていた 一九〇一年の「義和団議定書」に基づくもので 兵力は 二個連隊編成の一個旅団 七〇〇〇名 司令部は天津 北京と山海関に駐屯 第一連隊は 北京に第一大隊 豊台に第二大隊を派遣していた 華北の中国側は第二十九軍 総兵力は十万人 豊台には 指揮官が抗日派の第三十七馮師団長

中国本土から(満州事変により)満州の切り離し 関東軍の河北進出 河北自治工作に刺激され 華北には 反日・抗日・侮日の機運がみなぎり 盧溝橋南の宛平県城を守る二個中隊はイキリ立ち その目と鼻の先で 七月七日夜 支那駐屯軍の二個中隊が 夜間演習を開始

十一日の閣議で 五師団を派遣することを決め 盧溝橋事件を「北支事変」と呼ぶことにした 十五日に 航空兵力と後方担任部隊の派遣を決定 第二十九軍は 蒋介石直系の中央軍 それを叩いて 二十日まで に 石家荘・德州の線まで 進出するつもりであった

蒋介石は これを知るや 廬山で十七日 有名な「生死関頭」演説をおこなった 「盧溝橋を占領されるならば 北京は 第二の奉天になり冀察地方は かつての 満州国となるおそれがある 盧溝橋事件は 全国の問題であり あくまでも 死守しなければならぬ」という「全面抗戦」の呼びかけをおこなった

三つの疑問 事件を誰が どう利用したか

- ① 最初に誰が発砲したのか 今なお明らかでない
- ② 宛平県城を攻撃した牟田口連隊長の行動は 過剰反応ではなかったのか という疑問
- ③ なぜ政府は現地交渉で 停戦が実現したのに

十時半ころ 参加した二つの中隊の頭上を どこからともなく 小銃弾十数発が飛来 清水中隊長は演習を中止し 部隊を集結 人員点呼すると 兵一名の姿が見えない 部隊は大隊長の指示を仰ぎ 現場に留まり 間もなく第三大隊の主力が 急派されてきた 行方不明の兵士は 何事もなく中隊に戻っていた 牟田口大隊長は 連隊長に電話で指示を求めた 「敵に撃たれたら撃て」 連隊長は即座に答えた 翌八日朝五時半 第三大隊は直ちに 宛平県城に向かって 攻撃を開始した

その後 交戦は断続し いずれも小規模で 日中双方の代表による 現地交渉がおこなわれた 七月十一日 第二十九軍代表の謝罪 宛平県城 龍王廟付近からの中国軍の撤退 抗日団体の取締りを主張する 日本側の要求を 中国側が受け入れ 停戦協定が成立 事態は これで収束されるものと思われた ところが近衛内閣は 陸軍中央部の強硬論に押され

直ちに 大量派遣を決定したのか だが 発砲の責任はどこにあったかの問題以上に それを誰が どう利用したのか その方が それ以上に重大問題だ

これを契機に 日中全面戦争に

近衛内閣は 「支那駐屯軍の行動は自衛のため 不拡大・平和的・局地的処理の方針」と言ったが 現実には 増兵に次ぐ増兵で 拡大方針が貫かれ この「事件」が 序曲になり事態は 日中全面戦争へと 展開していった

「陸軍中央部」の強硬論者は かねて 華北を 満州国の緩衝地帯化にする構想を持ち 盧溝橋事件を 近衛内閣は 一つの跳躍台に 利用しようと考え 大量出兵で 強引に戦線を拡大 ルビコンの橋を渡ったのが 真相のようだ